額田王覚書

――大海人皇子にとっての「むらさきのにほへる妹」――

北島　徹

一

万葉の女流歌人というと、第一に名前のあがるのが額田王であろう。『万葉集』に載る額田の歌は、長歌三首、短歌九首の計十二首だけであり、数の上では坂上郎女の八十四首に到底及ばない。笠女郎の二十九首、狭野弟上娘子の二十三首と比べてみても、十二首は多い数ではない。にもかかわらず額田王が万葉女流歌人の筆頭にあげられるのは、とりもなおさずその歌の質の良さ、つまり歌のうまさによるものであろう。後世の批評に耐えたばかりか、多くの人に愛されてきたのは、そこに理由がある。

しかし、額田王の歌のうまさは、何も後世の人によって発見されたわけではない。彼女が生きていた時代から、その歌の才能は大いに認められていたのである。

額田王の歌十二首を部立別に題詞・左注によって、その作歌事情を示しつつ並べると、次のようになる。

雑歌

① 大化四年、比良行幸時の宇治での作。（一・七）

② 斉明七年、百済救援のための遠征時の熟田津での作。（一・八）

③ 斉明四～五年、紀伊牟婁温湯行幸時の作。（一・九）

④ 天智朝、春山秋山を競う詩宴での作。（一・十六）

⑤ 天智六年、近江遷都時の作。（一・十七、十八）

⑥ 天智七年、蒲生野遊猟時の大海人皇子との唱和。（一・二〇）

挽歌

⑦ 天智十年、天皇の大殯の時の作。（二・一五一）

⑧ 天智十年、天皇の陵墓より退散する時の作。（二・一五五）

相聞

⑨ 天智天皇を思う歌。（四・四八八）

⑩ 持統朝、吉野行幸時に、吉野の弓削皇子に大和（飛鳥か）より贈る歌。（二・一一二、一一三）

これらを眺めると、最後の⑩の一一二、一一三を除く十首が、すべて皇極朝から天智朝の間に詠まれたものであることがわかる。さらにこれら十首のうち、①・②は、斉明天皇（皇極上皇）の作との異伝を持ち、⑤は天智天皇の作との異伝を持っていて、それぞれ各天皇の代詠歌であると思われる。③の紀伊行幸時の作は、作者の異伝がないものの、その歌の内容からして、斉明天皇の心になって詠んだものであることがわかり、これも代詠歌である可能性がある。[注1]

このように、行幸や、百済救援のための遠征、また遷都という朝廷にとって重要な意味をもつ、その時々に

天皇に代わり、天皇の心になりきって歌を詠んでいることを見ると、いかに額田王がその歌才を高く評価されていたかがわかる。

さて、残る歌のうち、④は天智天皇や藤原鎌足の前に並ぶ廷臣が、漢詩でもって春山と秋山との憐を競うという場で、額田王が「歌」によってその判定を下したというものである。公的な場での重要な役割を担っていることに違いはない。それは⑦・⑧の天智天皇への挽歌の場合も同じであったと思われる。

⑧を見てみよう。

山科の御陵より退り散くる時に、額田王の作る歌一首

やすみしし　わご大君の　恐きや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜のことごと　昼はも　日のことごと　音のみを　泣きつつありてや　ももしきの　大宮人は　行き別れなむ[注2]　（二・一五五）

この歌では、御陵造営にあたった大宮人たちの心を代弁していることが読み取れる。また⑦は、

天皇の大殯の時の歌二首

かからむとかねて知りせば大御舟泊てし泊まりに標結はましを（二・一五一）

という歌であるが、これはその次の舎人吉年の歌、

やすみししわご大君の大御舟待ちか恋ふらむ志賀の唐崎（二・一五二）

これと並べてみると、同じ「大御舟」を詠み込んでいることによって、額田王も舎人吉年も、個人的な思いを詠んだのではなく、周囲の人びとの心を汲み取って詠んだものと見ることができる。『万葉集私注』に「感動よりも理が這入って来て歌は一層よそよそしくなる」[注3]と厳しすぎるほどに評されているが、それも個人的な思いを込めた歌でないためのことと理解できる。

以上のようにざっと眺めてきただけであるが、これによって額田王の歌人としての姿が、ある程度見えてこ

よう。それは、

一、天皇や周囲の人びとの心をよく知ることができたこと。

二、その心を見事に代弁し、歌に表現する才能を持っていたこと。

ということである。

では額田王は個人的な思いを詠むことがなかったのか。私は、それが残る⑥と⑨・⑩とではなかったかと考えている。本稿では、このうち⑥をとり上げ、額田王と大海人皇子とのそれぞれの心情を、⑥の歌に対して答えた大海人皇子の歌をもとに探り、この当時の二人の関係、置かれていた立場を考察するのが目的である。⑨・⑩については、いずれ稿を改めて論じることにしたい。

二

天皇、蒲生野に遊猟する時に、額田王の作る歌

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る（一・二〇）

皇太子の答ふる御歌

むらさきのにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも[注4]（一・二一）

これら二首の意味と、二首が詠まれたいきさつについて、いつの頃からかは特定できないが、一般に次のように解釈されている。

額田王は初め大海人皇子に嫁ぎ、一人の娘・十市皇女を生んだものの、後に天智天皇に請われてその妻になってしまう。しかし二人はなお思いを交わしていて、蒲生野の遊猟の場で、大海人は額田に袖を振り、抑え

がたい慕情を示すのであった。額田はそれを、人目につくではないか、とたしなめた歌を詠み、大海人は、好きだからこそ人妻の身とはなっていてもお前を恋しく思うのだ、と答えたのである。

こういった解釈に対して、これら二首はそんな深刻な恋歌ではなく、「宴会の座興を催した歌」だと考えたのが、折口信夫であった。[注5] この考えは山本健吉・池田弥三郎両氏の『万葉百歌』に継承され、そこでは「才女の額田王がからかいかけ」、天武もそれに「しっぺ返しをし」「おおっぴらな愛情の言葉を投げつけ合いながら、戯れ、演技し」たのだと説かれている。[注6]

以後、この考えが次々に受け継がれ発展してゆく。[注7] が、いずれもこの二首は秘められた恋心を歌ったものなどではなく、あくまで宴席を盛り上げるための歌なのだということに変わりなく、これが現在通説化していると言えよう。

この二首が恋歌を載せる相聞の部にではなく、雑歌の部に収められていることや、歌われたのが天智七年(六六八)、天皇即位後の五月五日に行われた盛大な遊猟当日のことであったことなどを考えると、やはり公的な場での作と見るのが穏当であろう。

これに対し、この二首をまったくの秘められた恋歌であると見られたのは吉井巌氏である。氏は「額田王覚書」において、次のように推定されている。

この二首が秘密の作――少なく共、天智に対しては秘めた作であつたことは十分に想定せられる。とすればそれは薬狩の公的な場面や公の宴で歌はれたものではないであらうし、天武の治世ではともかくとして天智の宮廷で採録・保存せられたものでもあるまい。(中略)或いは、この作は、額田王に関係を持つ氏族のある私邸での私的な宴席で作歌せられ、額田王或いはその関係者によつて、採録・保存せられたものではなからうか。[注8]

さらに、これが巻一に収められたことについては、この二首を含めた三番から二一番までの歌を「額田王又は額田王に近い人の手による」メモと見、それがそのまま巻一に載せられたからだ、と説かれている。

この吉井氏の説は、当該二首を事実上恋歌であったと認めている点で、通説とは大きく違っている。この説に惹かれたのは服部喜美子氏である。氏は吉井氏の論に惹かれつつ、この二首を真情の交わされた歌でありながら、宴の席で詠まれたものと解された。そして「宴席座興の歌として発表されたとしても、額田王の大海人皇子への心のゆらぎがなければ、けっしてその歌は甘美のうったえを感じさせるものとはならなかったであろう」[注9]と述べられ、二人の間には、やはり互いを思う恋心が存在していたととられている。[注10]これは先にあげた一般の解釈にやや近い説と言えるだろう。

以上、従来説のいくつかを見てきたが、何しろ有名な歌であり、また多くの人びとに愛されてきた歌であるだけに論考も尽きることがない。最近では、この二首を実作ではなく、物語り歌のようなものとしてとらえる説も出ている。[注11]本来ならすべての説をあげ、それぞれの問題点を検討した上で私の論を展開してゆくべきなのだが、諸説を見てゆくと、次の二点に的が絞られるようなので、このあたりでとどめておくことにする。

従来説かれているものを、額田王と大海人皇子の心に即してとらえるなら、結局は次のどちらかになるのではないだろうか。

一、この二首には二人の恋心が込められている、と見るもの。

二、この二首には二人の恋心など存在しない、と見るもの。

このように整理したところで、以下大海人皇子の答歌の表現に着目し、検討を加えてゆくことにする。

三

大海人皇子はその答歌において、額田王のことを「むらさきのにほへる妹」と表現している。これは具体的に、額田のどのような姿を表しているのだろうか。

まず「むらさき」が何であるのかを明らかにしなければならないだろう。

「むらさき」を『時代別国語大辞典上代編』にあたると、

① むらさき。むらさき科の多年生草本。山野に自生し、夏に白色の小花をつける。太くて長い根は薬用とし、また紫の色素を含むので乾燥させて染料とした。

② 紫草で染められた色。紫色。[注12]

と説明されている。「むらさき」は、草そのものの名であると同時に、色の名でもあるわけである。大海人皇子の歌の場合は、そのどちらを指すのであろうか。

今テキストで原文にあたると、初句は「紫草能」となっていて「草」の字が付いている。『校本万葉集』[注13]を見ても諸本間での異同はないので、これが本来の表記だと見てよいだろう。とすると、これは草そのものを表しているのではないかと思えてくる。

集中「むらさき」の語は、枕詞「むらさきの」も含めて十七例を数えることができる。これを原文の表記別に示すと次のようになる。

紫　　（十三例）
紫草　（二例）

武良前（一例）

牟良佐伎（一例）

これらの表記の違いに意味上の違いが見出せるのか。煩を厭わず、全用例を原文であげて検討することにする。最後の仮名書きの例は、一首全体が仮名書きであり、巻十四という全巻が仮名書きされている巻に収められているので、「むらさき」の部分だけが仮名書きされているわけではない。したがって他と比較することはできないので、ここではとり上げないことにする。

「紫」

① 託馬野尓　生流紫　衣染　未服而　色尓出来（三・三九五）

② 辛人之　衣染云　紫之　情尓染而　所念鴨（四・五六九）

③ 紫　絲乎曽吾搓　足檜之　山橘乎　将貫跡念而（七・一三四〇）

④ 紫之　名高浦之　愛子地　袖耳觸而　不寐香将成（七・一三九二）

⑤ 紫之　名高浦乃　名告藻之　於礒将靡　時待吾乎（七・一三九六）

⑥ 紫之　根延横野之　春野庭　君乎懸管　鶯名雲（十・一八二五）

⑦ 紫之　名高乃浦之　靡藻之　情者妹尓　因西鬼乎（十一・二七八〇）

⑧ 紫　帯之結毛　解毛不見　本名也妹尓　戀渡南（十二・二九七四）

⑨ 紫　我下紐乃　色尓不出　戀可毛将痩　相因乎無見（十二・二九七六）

⑩ 紫　綵色之蘰　花八香尓　今日見人尓　後将戀鴨（十二・二九九三）

⑪ 紫者　灰指物曽　海石榴市之　八十街尓　相兒哉誰（十二・三一〇一）

⑫ ――羅丹津蚊経　色丹名著来　紫之　大綾之衣　墨江之　遠里小野之　真榛持　丹穂之為衣丹――

⑬　紫乃　粉滷乃海尓　潜鳥　珠潜出者　吾玉尓将為（十六・三八七〇）

「紫草」

⑭　紫草能　尓保敝類妹乎　尓苦久有者　人嬬故尓　吾戀目八方（一・二一）

⑮　紫草乎　草跡別々　伏鹿之　野者殊異為而　心者同（十二・三〇九九）

「武良前」

⑯　茜草指　武良前野逝　標野行　野守者不見哉　君之袖布流（一・二〇）

まず「紫」の表記をとる歌を見ると、紫色を指すものがいくつか出て来る。③⑧⑨⑩⑫がそれである。⑬の「粉滷」にかかる枕詞の例も、紫の色が濃い意味で「粉滷」の「こ」にかかると思われるので、これも紫色を指すと見てよいだろう。また染料としての例（①②）なども、色に重点が置かれていると考えれば、色を表しているものと見られる。「名高」にかかる枕詞の三例（④⑤⑦）も、染料として名高い意味でかかる言葉なので、同様に見てよかろう。⑪も、染色の際の触媒として椿の灰が用いられたことを示しているので、この「紫」も色に関係している。とすると、例外は⑥だけということになる。これとて、紫草の根が紫色をしていることを考えると、その色に引かれてのものと見ることも可能である。ともかく、「紫」の表記をとるものは、多く色を表していると見てよいだろう。

さて問題の「紫草」だが、当該歌を除く一首（⑮）の例は、確実に草そのものを指していることがわかる。これは当該歌の「紫草」を、草そのものを指していると見るのにはなはだ都合がよい。額田王の歌（⑯）が、「武良前」となっているのも、「紫」と書くと色を表してしまうと考えたからではないだろうか。

このように大海人皇子の歌の「むらさき」を紫草ととると、ちょうどこの遊猟のあった五月五日の野の情景

（十六・三七九一）

が浮かんでくる。大海人皇子は、眼前の野原一面に白い花を咲かせている紫草を歌に詠み込んだのではなかっただろうか。

四

次に「にほふ」の意味を明らかにしなければならない。

現代語の「におう」は、「香る」とほぼ同じ意味の語として使われている。この使い方は、おおむね平安朝以降のことと言ってよく、万葉では、はっきりと「香る」意味に用いられているものが一例（「橘のにほへる香かも」十七・三九一六）、また「香る」意味を含むかと思われる例も一例（「咲きにほふ花橘のかぐはしき親の命」十九・四一六九）となっている。これら二首は、共に万葉後期の家持の歌なので、万葉時代の「にほふ」は、一般的に視覚的な意味でとらえられていたと見てよいだろう。

さて、この「にほふ」の意味について『時代別国語大辞典上代編』（前掲書）は、次のように説いている。

① 赤く色づく。ⓐ花が美しい色に咲き、葉がもみじする。ⓑ他のもの（土・花など）の色が映り染まる。

② 美しい色彩に輝く。美しくつややかである。

③ かおる。芳香がする。

このうち②の用例として、大海人皇子の二一番の歌が引かれている。「輝くように美しい妹（額田王）」の意味でとらえられていることがわかる。しかし『万葉集』によって「にほふ」の語の使われている歌を見てゆくと、「にほふ」にはもう少し複雑な意味が含まれていることがわかり、当該歌の「にほへる妹」も、単に「輝くように美しい妹」という程度の意味でとらえるだけでは、不十分だと言わざるを得ないことになるのである。

そこで、以下「にほふ」のもつ意味を再検討し、その上で「むらさきのにほへる妹」の意味をとらえなおすことにする。

前項で、二一番の歌の「むらさき」は、野原一面に白い花を咲かせている紫草を表しているのではないかと述べたが、そうすると「むらさきのにほへる妹」という時、白い紫草の花が「にほふ」ことになる。そこでまず、「にほふ」ものが白いものであっても問題がないことを明らかにしておかなければならない。

栲領巾の鷺坂山の白つつじ我ににほはね妹に示さむ（九・一六九四）

馬並めて高の山辺を白妙ににほはしたるは梅の花かも（十・一八五九）

――ほととぎす　来鳴かむ月に　いつしかも　早くなりなむ　卯の花の　にほへる山を　よそのみも　振り放け見つつ――（十七・三九七八）

池水に影さへ見えて咲きにほふあしびの花を袖に扱入れな（二十・四五一二）

「にほふ」が白い花の咲いている様子に使われているものをあげてみた。白い花の例としてはこれだけなのであるが、他に「白たへにほふ真土」（七・一一九二）といった例もあるので、ともかく「にほふ」は白いものにも使えることがこれでわかる。このことを確認したところで、以下「にほふ」の意味について考えてゆくことにする。

――山吹を　やどに引き植ゑて　朝露に　にほへる花を　見るごとに　思ひは止まず　恋し繁しも（十九・四一八五）

右の歌では、恋心を少しでも静めようと思って山吹を庭に植えたが、その「にほへる花」を見ているといよいよ恋しくなってくる、と詠んでいる。なぜ山吹の「にほへる花」を見ると恋しくなるのだろうか。

山吹のにほへる妹がはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ（十一・二七八六）

この歌を『日本古典文学全集』は、こう訳している。

山吹の花のように　美しいあの娘の　はねず色の　赤裳の姿が　ずっと夢に見える[注14]

この歌は、夢に出てきた恋人の赤裳の姿を詠んだものである。はねず色というのは、桃色がかった紅色のことだという。それが赤裳の形容であることは言うまでもない。ではこの歌で山吹の果たしている役割は何なのだろうか。先の歌とも合わせて考えると、山吹の「にほふ」様は、単に美しいとか色合いの問題ではなく、まるで恋しい人と出会った時のように、見る者に強い印象を与えるものであった、と考えてよいだろう。だから恋人に結びつくのである。

またこんな例がある。

引馬野ににほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに（一・五七）

これは、大宝二年（七〇二）十月の太上天皇（持統）三河行幸の時に長忌寸意吉麻呂が詠んだ歌である。旧暦十月は榛（ハンノキ）の花の季節ではないので、「にほふ榛原」というのは紅葉した様子を表していることがわかる。作者は周囲の者に対して、この紅葉した榛原の中に入り込んで旅の記念として衣を「にほはせ」なさい、と呼びかけたのである。この「にほはす」が、紅葉の色を衣に移す意味であることは、容易に理解できる。

我が背子が白たへ衣行き触ればにほひぬべくももみつ山かも（十・二一九二）

この歌も、白い衣が触れたら、その色が移って染まってしまいそうに紅葉していると、同様のことを歌っている。

ここまでにあげた歌を見ると、「にほふ」というのは、単に花が咲くとか、美しく輝くなどという意味を表す語ではなく、あるものから何かが移ってきて変化してしまうことを意味する言葉であったことがわかる。次の歌を見ると、そのことが一層はっきりとするだろう。

筑紫なるにほふ児故に陸奥の香取娘子の結ひし紐解く（十四・三四二七）

この歌は防人の歌だと思われる。旅立ちの時に、恋人か妻であった香取娘子が結んでくれた紐を、筑紫の娘のために解くというのだから、この男は故郷の女を気にしながらも、旅先で出会った女と寝てしまったわけである。その女が「にほふ児」だという。筑紫で男が娘と出会った時、その娘から何かが男の中に移ってきた。すると男の心の中に変化が起きた。それまで故郷の女のことを慕い続けてきた心が、旅先の女の恋模様に染まってしまったということである。

これで「にほふ」のもつ意味がある程度明らかになったと思うが、まだもう少し認識しておかなければならないことがある。

紅に染めてし衣雨降りてにほひはすともうつろはめやも（十六・三八七七）

この歌では「においはしても移ろうことはない」と言っているのであるから、「にほふ」と「移る」とは違った意味をもつ言葉であることがわかる。「移る」というのは、何かが移動することを意味しているので、移動してしまえば、もとの所はそのものがなくなるか減るかしてしまうことになる。右の歌では、色が抜けてあせてしまうことを意味している。しかし「にほふ」の場合は違う。いくらにおっても、もとの所から何も減りはしないのである。このことも忘れてはならない重要な点である。「にほふ」が、後に嗅覚で感じるものにも使われるようになるのは、この意味を合わせもっているからだと考えられる。ニオイは、いくら嗅いでもそう簡単に消え去るものではないのである。この点を考えると、「にほふ」は、何かが移ってゆくというよりも、伝染してゆくと言った方がよいのかもしれない。

もう一点見逃してはならないことがある。これまでにあげた例を見てもわかることだが、「にほふ」の使われている歌を見てゆくと、「にほふ」ことによって起こる変化は、すべて見る者にとって喜ばしいものであったと

いうことである。

以上をまとめると「にほふ」のもつ意味は、

見る（触れることも含む）ことによって、その対象の持つある性格が、見ている者に伝染してゆく。対象そのものに変化は起こらないが、見た者の中にはある種の喜ばしい変化が生じる。

このようなものであると言えるだろう。

「にほふ」に右のような意味を認めると、大海人皇子の歌の「にほへる妹」は、「見ていると何かがやってきて、ついいやな思いが消え、恋心が芽生えてくる。そんなお前」と解釈できるだろう。

五

次に、二一番の歌の残りの部分「憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」について考えることにする。この部分は、非常に屈折した表現をとっている。『日本古典文学全集』の頭注にもこのように書かれている。

メヤモは反語。第三句の「憎くあらば」という反実仮定を受けて、憎くないからこそ恋い慕うのだ、という気持ちを、屈折した形で述べたもの。[注15]

私は以前から、この部分はどうしてこのように複雑な表現をとっているのだろう、と疑問に思ってきた。それはこの部分を訳す度に、まだるこしい気分にさせられてきたからである。それはつまり、かなり言葉を補わないと、この部分を正確に理解できないと考えていたからである。私はこんなふうに訳していた。

憎いと思ったら、人妻のために私は恋しく思おうか、いや恋しくは思わない。憎いと思わないから人妻であっても私は恋しく思うのだ。

仮定と反語と両方の意味を明確に示しながら訳すと、どうしてもこうなってしまうのである。

この煩わしさは、文法的意味を、訳の言葉にそのまま置き換えようとしているところからくるのではないだろうか。思うに、仮定と反語とのそれぞれの文法的意味を、いちいち考えようとするところに間違いがあるのではないか。この部分は確かに仮定と反語とからなっている。しかしそれをそのまま、「仮定しておいて、それを反語でおさめる」などととらず、「仮定プラス反語」という、ひとかたまりのものと見れば、そこに何らかの表現性を発見することができるのではないか。大海人皇子はこの部分で、どのようなことを表現しようとしたのか。以下集中に同じ形をとる歌を求め、その表現性を探ることにしたい。

この部分の「仮定プラス反語」は、細かく見ると「未然形＋ば＋（一人称）動詞＋めやも」となっている。この前半の「未然形＋ば」は「仮定条件」と言い換えられる。後半の「（一人称）動詞＋めやも」は、「意志の反語表現」と言える。これを合わせて「仮定条件下での意志の反語表現」と呼ぶことにする。

この形をとる歌は、集中に十九首を数えることができる。二一番の歌と同じ「我恋ひめやも」の結句を持つものだけでも、当該歌以外に十一首あるので、それを見ることにする。

① なかなかに絶ゆとし言はばかくばかり息の緒にして我恋ひめやも（四・六八一）
② 若鮎釣る松浦の川のなみのなみにし思はば我恋ひめやも（五・八五八）
③ 膝に伏す玉の小琴の事なくはいたくここだく我恋ひめやも（七・一三一八）
④ 別れてもまたも逢ふべく思ほえば心乱れて我恋ひめやも（九・一八〇五）
⑤ 朝霞鹿火屋が下に鳴くかはづ声だに聞かば我恋ひめやも（十・二二六五）
⑥ 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば我恋ひめやも（十・二三〇〇）
⑦ あらたまの寸戸が竹垣編目ゆも妹し見えなば我恋ひめやも（十一・二五三〇）

⑧　さす竹のよ隠りてあれ我が背子が我がりし来ずは我恋ひめやも（十一・二七七三）
⑨　伊勢の海ゆ鳴き来る鶴の音どろも君が聞こさば我恋ひめやも（十一・二八〇五）
⑩　芝付の御浦崎なるねつこ草相見ずあらば我恋ひめやも（十四・三五〇八）
⑪　あしひきの山桜花一目だに君とし見てば我恋ひめやも（十七・三九七〇）

①は「大伴宿祢家持、交遊と別るる歌三首」と題される歌群の第二首目の歌である。前後には次の歌が置かれている。

けだしくも人の中言聞かせかもここだく待てど君が来まさぬ（四・六八〇）
思ふらむ人にあらなくにねもころに心尽くして恋ふる我かも（四・六八二）

第一首では「ひょっとして人の中傷を聞いたからなのか」といぶかっているので、家持には友の離れていった理由がわかっていないようである。しかしそれでも、第三首にあるように、自分のことを思ってくれない友のことを、家持はなお思っているわけである。

自分から絶交してやるという強い意志もないまま、わけのわからない状態で友のことを恋し続けるという、不安定な状況に家持はいる。そんないら立ち、軽い腹立ちを吐露したものが、①の歌だということである。

いっそ「絶交だ」と言ってもらいたいものだ。そう言ってくれたら、こんなに命がけで恋しがったりするものか。

①の歌はこのように訳してこそ、この時の家持の気持ちがよくわかるのではないだろうか。変に反語を説明するように「恋しく思ったりしようか、いや思わない」などと訳してしまうと、家持の表現しようとするところがわからなくなるのである。私はこの「仮定条件下での意志の反語表現」に、「いら立ち・腹立ちの吐露」という意図が働いていることを見るのである。

例えば、現代語で言う時のことを考えて見ればよくわかる。

ⓐ「嫌いだったら、会ったりしない」

ⓑ「嫌いだったら、会ったりするものか」

右の仮定表現をもとに戻せば、どちらも「嫌いではないから会うのだ」ということになる。共に意味は同じ文だということである。しかしⓐとⓑとでは、明らかに表現意図が違っている。ⓐの方には、逆説的に言うことで会うことを強調しようとする意図がある。しかしⓑの方は、強調よりも、嫌いになれないことへのいら立ちや不満があり、それをぶちまけようとする意図が働いていると言えるだろう。

先の家持の歌①の場合は、相手に贈った歌ではないので、いら立ちを自分に向けてぶつけたことになろう。いわば、独り言のようなものだということである。

②以下を見てみよう。

②は相手のことを並に、つまり適当に思えないから恋してしまう、といういら立ちが見てとれる。③は、恋の障害があることへの不満、④は、もう会えそうにないことへの腹立ちがある。⑤⑥⑦⑧⑨は、相手の声が聞こえないことや姿が見えないこと、来てくれないことへの不満がある。⑩は逆に、会ってしまったために恋に苦しまなければならない、といういら立ちが出ている。⑪では、君と共に見られないことへの不満がある。そしてこれらの歌はすべて、そういった不満やいら立ちをぶちまけているのである。

このように「仮定条件下での意志の反語表現」には、「不満やいら立ちの吐露」という表現性があると言ってよいだろう。

とすると、二一番の歌は「嫌いになれないことへのいら立ち、恋せずにはおれない腹立ちを、大海人皇子が額田王にぶつけた歌」だということになろう。

六

以上、大海人皇子の歌を三つの部分に別けて検討してきた。それぞれで得たものを、まずここに示すことにする。

一、「むらさき」は、蒲生野一面に白い花を咲かせている紫草を表す。

一、「にほへる妹」は、見ている大海人皇子に恋心を芽生えさせる存在としての額田王を示す。

一、「憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも」は、憎めないからこそ人妻であっても恋せずにはおれない、といういら立ちをぶちまけた表現である。

これらをもとに一首を解釈しなおすと、次のようになろう。

蒲生野一面に白い花を咲かせている紫草。その花のように、見ている私の心をこんなにうれしくさせてしまうのがお前だ。これまではいやな思いでいたのに、お前はそんな私の心を変えてしまう。お前が嫌いだったら、人妻であるお前のために恋しく思ったりするものか。いっそ嫌いになれたら、どれほど楽なことか。

大海人皇子は、額田王の中にまだ自分への思いがあることを見てとった。そしてその思いに触れて、あきらめたり恨んだりしていたそれまでの思いが消え、恋心がまた芽生えてきたことを知った。しかし恋しくなればなるだけ、どうしようもない現実に苦しまなければならない。大海人はそのことにいら立ちをも覚えている。歌の表現を通して見る限り、大海人皇子の心はこのように揺れ動いているのである。

大海人皇子は、そんな思いを額田王にぶつけた。そしてそれは額田王の二十番の歌への答えであった。大海

人皇子は「嫌いだったら恋しがったりするものか」と歌っている。とすると、額田王は「今は私のことを嫌っているのでしょうね」と問いかけたのではないか、と思えてくる。しかし額田王の歌に、直接そう問いかけた言葉はない。

額田王は「野守は見ずや君が袖振る」と歌い、自分に対して盛んに袖を振って愛情を示す皇子のことを「人が見るではないか」と、まるでとがめているような歌い方をしている。大海人皇子は、これに答えようとしたのではないだろうか。つまり「私の方からお前の気を引いているように言うが、その逆ではないか。お前が『にほへる妹』だからこそ、つい恋心が甦り、袖を振ってしまったのだ」と。

この二首は、通説のように遊猟の後の宴の席で詠み交わされたのかもしれない。この時四十歳になろうかという二人[注16]がこんな歌を交わせば、一座は大いに沸いたことだろう。それはそれで成功であったと思われる。しかしそれとは別に、二人は二人でそれぞれの思いをぶつけ合った。この二首には二人の恋心が込められていたに違いない。

このように見ると、二人の置かれている立場もおのずと見えてこよう。額田王は、やはり天智の妻であったということである。それでも大海人皇子は、なお恋しく思っているのであるから、以前は額田と思いを交わす仲であったことも確かであろう。『日本書紀』天武二年二月の条の「天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生しませり」[注17]は、そのことをも示していると言えるだろう。

注

1　この歌は、

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣　我が背子がい立たせりけむ厳橿が本（一・九）

であるが、伊藤博『万葉集全注　巻第一』（有斐閣、昭和五八）では、この「我が背子」を、この行幸時に処刑された有間皇子に擬している。有間皇子は斉明天皇の同母弟・孝徳天皇の子にあたるので、伊藤氏は次のように説いておられる。

斉明側近の御言持ち歌人（代作者の意、北島注）であるが故に、額田王がその女帝の心中に成り代って詠んだ歌と推測すれば、この「我が背子」は、斉明の、弟や甥に対する複雑な心情をこめた言葉として浮上することになる。

2　本稿でとり上げた万葉の歌は、すべて佐竹昭広他『万葉集　訳文篇』及び同『万葉集　本文篇』から引用し、特に断らない限り、文字・訓ともこれらによることにした。

3　土屋文明『万葉集私注』筑摩書房、昭和五一。

4　この歌の初句は、テキストで「紫の」となっている。これでは「紫色の」の意味にとられる恐れがある。後述するように、このムラサキは色ではなく草そのものを表していると考えるので、テキストの表記を改め、「むらさきの」と仮名書きすることにした。

5　折口信夫「額田女王」『折口信夫全集　第九巻』中央公論社、昭和五一。

6　山本健吉・池田弥三郎『万葉百歌』中央公論社、昭和三八。

7　伊藤博氏は「遊宴の花」（『万葉』第八二号所収、『万葉の歌人と作品　上』塙書房、昭和五〇）において、額田王は遊猟当日の宰領者である天智天皇の一夜妻と意識されていて、その「人妻」に対して本当の夫である大海人がこのように歌うことによって、遊猟とその主催者とを讃美することになった、と述べられている。額田王をあくまで大海人皇子の妻であったと見られている点が、特に注目される。森朝男氏の「歌垣を揺れ曳く宴」（『古代和歌と祝祭』有精堂、昭和六二）は、この二首を歌垣を起源とした「人妻とそれに恋する男との掛けあい」であると見、「その表現するところは、歌垣的要素を継承した宴の座の煽動効果のためにのみあった」のであって、「二人の作者の境遇を表してなどいない」と述べられている。

8　吉井巌「額田王覚書―歌人額田王誕生の基盤と額田メモの採録―」『万葉』第五三号。

9　服部喜美子「蒲生野の贈答歌」『万葉集を学ぶ　第一集』所収、有斐閣、昭和五一。

10　この服部氏の説に近いものとしては、既に、西郷信綱氏の『万葉私記』（未来社、昭和四五）などがある。

11　三浦佑之氏の「額田王と蒲生野」『万葉の風土と歌人』所収、雄山閣、平成三。

12　上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典上代編』三省堂、昭和四二。

13 『校本万葉集』新増補版、岩波書店、昭和五四。

14 新編日本古典文学全集『万葉集　三』小学館、平成七。

15 新編日本古典文学全集『万葉集　一』小学館、平成六。

16 天武天皇も額田王も、その生年がはっきりしていない。今仮に、伊藤博氏の説（『古代和歌史研究』塙書房、昭和五一）に従って舒明三年（六三一）に二人が生まれているとすると、天智七年（六六八）当時の二人は、共に三十八歳ということになる。

17 日本古典文学大系『日本書紀　下』岩波書店、昭和四〇。

Summary

A Note on *Nukata-no-Okimi*

Kitajima Toru

Nukata-no-Okimi is one of the representative poetesses in *Man-yo-shu*. Her twelve poems have been favorites of many people from ancient times, but *Nukata* herself has not been well studied yet. The purpose of this manuscript is to try to capture a part of her actual life.

The most famous poem written by her is the 20th poem of the 1st volume of *Man-yo-shu*. Up to now, there have been two interpretations for this poem :

1. She expressed her secretive love for her ex-husband, *Oama-no-Miko,* in the poem.
2. The poem was written at a party to liven up the festivities.

To judge which interpretation is the right one, I examined the answering poem written by *Oama-no-Miko*. I analyzed the meaning of *Oama-no-Miko*'s poem dividing it into three parts. By doing so, I arrived at the conclusion that *Oama-no-Miko* wrote it with his love to *Nukata-no-Okimi*. Consequently, we can say that the interpretation 1 is correct : *Nukata* also wrote the 20th poem with her love for *Oama*.

Nukata and *Oama* had been husband and wife, but *Nukata* became one of *Tenchi-Tenno*'s imperial concubines. The 20th and the 21st poem are the poems written by *Nukata*, as a married woman, and *Oama*, who continued to love her even though she had become another man's wife.